

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：33902

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720274

研究課題名(和文)日本の大学英語教育におけるプログラム評価基準の構築

研究課題名(英文) Establishing a Framework of English Program Evaluation in the Japanese University Context

研究代表者

竹田 真紀子 (Takeda, Makiko)

愛知学院大学・総合政策学部・講師

研究者番号：30521744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、プログラム評価を通じた英語教育改革の実質化を目指すことが目的である。日本では、評価に対する教員の態度・意識は非常に否定的で、評価に対して価値が見いだせていないことがわかった。反対に、海外の英語教育専門分野別評価機関は、教育機関に非常に好意的に受け入れられている。それは、評価をする側とされる側が、教育の質を改善するという共通の目標に向かって対等な立場で協同して作業を行い信頼関係を築き上げる仕組みがあるからである。その為には、評価をされる側の教育機関の質改善の為に明確な方向性を示すだけでなく、評価に従事する教員自身のキャリア形成をサポートするような体制が必要である。

研究成果の概要(英文)：This study aims to facilitate improvement in English language education through program evaluation in the Japanese university context. Contrary to the situation in Japan where accreditation is often perceived as obstructive and unsupportive amongst the educators involved in the evaluation process, it is commonly perceived as essential and valuable in the UK and the US. A leading difference is that educators in the UK and the US see accrediting bodies not as monoliths of judgment but as partners in a mutual pursuit of growth and improvement whereby both benefit. Due to this equal and cooperative relationship between educators and accrediting bodies, a culture of continuous development is created at the institutions. This research will provide insight into how the accreditation process is currently perceived in Japan and upon contrasting this perception with other educational contexts will provide recommendations for improvement.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語教育 英語プログラム評価 アクレディテーション 教育の質保証 教育改善 大学認証評価 国際情報交換 イギリス：アメリカ

1. 研究開始当初の背景

近年の急速な経済、社会、雇用のグローバル化を背景に、「英語の使える人材」を育成することは喫緊の課題であり、日本の英語教育は改革を余儀なくされている。しかしながら、多くの大学で英語教育改革が行われ、「教育の質の保証」及び「説明責任」が問われるようになっても、プログラムを組織的に評価し、恒常的にその評価を教育のために活用している大学はまれである。またその評価手法や活用する方法も各大学によって様々であるため比較することは容易ではない。

平成 16 年度より始まった認証評価制度においても、大学の自己点検は透明性及び誠実さの欠如からその質は激しく批判されている。第三者評価は本来、意義のある継続的な教育改革実現のために欠かすことのできない手段であるが、その開発・運用は現実には大変難しく、特に英語プログラムについては多くの問題を抱えている(Mulvey, 2010)。

このように、認証評価導入や各大学での評価の取り組みは、必ずしも教育を改善するための教育評価になっていないことがわかっている。中央教育審議会が 2008 年 12 月に提出した『学士課程教育の構築に向けて(答申)』においても、日本の大学教育では「評価を通じた質の管理」が緩いことを指摘している(齊田, 2011)。これは日本において、認識された英語プログラムに特化した評価の枠組みが存在しないことが、その一つの原因であると思われる。

2. 研究の目的

本研究は、日本の大学英語教育における共通の評価基準の枠組みを構築し、大学英語教育改革の実質化を目指すことが目的である。教育改革や改善は、それまでのプログラムを適正に評価することによって初めて実現する。繰り返しになるが、日本には英語プログラムに特化した評価の枠組みや評価機関が

存在しない。大学の英語教育において現在実施されている第三者評価は、機関別認証評価である大学認証評価及び JABEE などの英語教育ではない専門分野別評価の一部としてのみであり、個別の英語プログラムの改善を第一の目的としているものではない。よって英語教育においては、評価が教育改善につながるような仕組みになっていないのである。これらの理由から、日本の大学英語教育における汎用性の高い評価基準を構築するとともに、その運用のあり方を模索することは、英語教育改革や改善にとって非常に意義のあることである。

3. 研究の方法

以上の目的のためには、まず日本の大学における第三者評価の現在のあり方を詳しく調べ、なぜそれが教育の改善に直接結びついていないのかを明らかにする必要があった。次に英語教育に特化した海外の専門分野別評価機関及び評価基準やその運用を調査し、そこから見えてくる日本の英語教育評価の課題をまとめた。具体的には、以下の方法・手順で調査を実施した。

- (1) 日本の大学認証評価機関のうち 2 つの機関(独立行政法人大学評価・学位授与機構、及び財団法人大学基準協会)の文献調査
- (2) イギリス及びアメリカの英語教育の専門分野別アクリディテーション機関である British Council と CEA (Commission on English Language Program Accreditation) についての文献調査(評価基準、組織、手順、方法、結果とその公開方法等)及び機関別アクリディテーションとの関係やそれぞれの役割及びメタ評価機関との関係
- (3) 大学英語プログラム評価の実施状況と英語教員のプログラム評価に対する意識に

ついて—中部地区を中心とした全国の15
大学に勤務する英語教員14名、のべ16
の大学英語プログラムについて調査

- (4) 私立大学4校、のべ12英語プログラムの
大学認証評価における自己点検評価書を
精査することにより、評価の土台である
評価書から英語教育の質を判断するこ
とが可能であるかについて検証
- (5) British Council に関する実地調査
—British Councilのアクレディテーショ
ン部門及びその認定を受けているロンド
ンとマンチェスターの大学附属の英語教
育機関及び私立語学学校6校に対して行
った実地調査及び訪問調査官(インスペ
クター)へのインタビュー調査
- (6) CEAに関する実地調査—CEA及びCEA
に認定を受けているワシントンDCとヴ
ァーモント州の大学附属の英語教育機関
及び私立語学学校7校に対して実施

4. 研究成果

本研究の目的は、日本の大学英語教育に
おける共通の評価基準の枠組みを構築し、大
学英語教育改革の実質化を目指すことであ
るが、評価基準の枠組みそのものを構築す
るところまでを期間内に終えることはできな
かった。しかしながら、研究調査を終えて、
日本の大学における第三者評価やプログラ
ム評価に関する課題及び教育評価自体にど
のような要素が含まれることが、評価を通し
た教育改善実現にとって必要不可欠である
のか、その前提となるものを明らかにするこ
とができた。

上記調査により得られた成果について、
(1) 日本の英語教育に関する評価の現状と課
題、(2) British Councilのアクレディテーシ
ョンに関する調査結果、(3) CEAのアクレデ
ィテーションに関する調査結果、(4) 日本の
英語教育専門分野別評価導入への示唆と今
後の展望、の順に以下に述べる。

(1) 日本の英語教育に関する評価の現状と課 題

日本において全大学で実施されている
大学認証評価は、機関を相対として評価する
「機関別認証評価」であり、海外の英語プロ
グラム評価のような「専門分野別評価」とは
性質を異にする。また大学基準協会のように
専門分野別評価分科会による評価を行って
いても、学部の専門性によって評価される為、
外国語を専門としない学部における英語教
育の質をどの程度評価しているかは疑問で
ある。

実際に評価の土台である自己点検評価
書の調査からわかったことは、英語教育に関
する内容は非常に少なく、内容に関しても成
績、外部テスト等の量的データが中心であり、
取り組みについても習熟度別クラス編成や
少人数制クラスといった記述はあるものの
その内実を理解できるものはほとんどない
ということである。また調査したすべてのプ
ログラムにおいてアンケートにおける授業
評価を実施してはいるものの、改善点につい
て言及しているものはほとんどなかった。自
己点検報告書から実際の取り組みや状況の
すべてを把握することはできないかもしれ
ないが、少なくともここから英語教育の実質
的な評価をし、改善点を検討することは難
しいことがわかった。

この結果は、大学英語教員に対して実施
した英語プログラムに関する評価の実態と
合致する。現状の大学英語教育の現場では、
たとえ評価のためのデータ収集を行ってい
ても、その結果を活用し改善につなげている
プログラムは、まれであり評価自体実施して
いないプログラムも多いことがわかった。こ
れらデータは、認証評価に用いられるもので、
自己点検評価書において記載されている量
的データと一致し、プログラムの改善を目的
とする形成的評価の手法はほとんど用いら
れていない。

評価に対する教員の態度・意識は非常に否定的で、改善につながらないとわかりながら認証評価などの強制的な評価活動に関わるため、強制されている意識が強い場合も多く、評価に対しての価値が見いだせていないことがわかった。また、現状の評価のあり方とは違った改善のための評価の重要性は認識していても、プログラム評価の文化がまだ日本の大学教育に定着していないため、評価手法や実施方法について戸惑いがあることもわかった。

(2) British Councilのアクレディテーションに関する調査

British Councilのアクレディテーションは、教育機関から非常に肯定的に受け止められている。それは、単に学生獲得のためのマーケティングの手段として有効だからではない。調査の結果から、それには主に3つの理由があると推測できる。

1つ目は、British Councilのアクレディテーション制度が英語教育に特化しており、評価が経験豊富な英語教育の専門家によって実施されていること。また評価結果も、明瞭で改善の為の建設的なアドバイスをもらえること。

2つ目は、評価基準のありかたや提出資料は、教育の質を恒常的にモニターし、改善するための枠組みを作り上げる方法を示唆するものであり、単に評価の善し悪しを判定するためだけのものではなく、教育機関の成長を助長し方向性を指し示すものであること。

3つ目は、評価基準やそれを補助するCPD frameworkは、評価活動に関わる教員やスタッフの職能開発を具現化し、評価活動を行うことがキャリア形成をする上で大切なことであると評価に従事する者が認識できていることである。このことによって、評価を通して恒常的に教育やサービスの質及び教員

としての自己改善をする文化が定着している。

(3) CEAのアクレディテーションに関する調査

CEAとBritish Councilのアクレディテーションの主な違いは、2つある。1つ目は、British Councilの評価が非常に経験豊富なベテランの調査官によって行われる“インスペクション”であるのに対し、CEAは他の教育機関で働いている同業者のボランティアによって行われる“ピア・レビュー”を基本としていることである。2つ目は、British Councilは、提出資料のみを参考に訪問調査によって評価が実施されるのに対し、CEAは、資料に加え、自己点検評価書をもとに訪問調査が行われる点である。

CEAのアクレディテーションは、自己点検評価書の作成に必要な多大な労力及び時間に関するものを除いては、アメリカの英語教育機関に非常に肯定的に受け止められており、その社会的な重要性も非常に高まってきた。その主な理由は、4つある。

1つ目は、自分たちが評価を実施し、国の英語教育改善に貢献しているという意識が形成されることである。CEAの評価は、評価者を認定校の教職員や同僚たちが担当し、最終評価も選出された認定校の代表者が決定するピア・レビューによるからである。

2つ目は、British Council同様に、評価基準、提出資料、自己点検評価書は、教育の質改善の枠組みを作り上げる方法を示唆しており、その重要性を教員やスタッフが認識できていることである。

3つ目もBritish Councilと同じように、評価基準の中に評価に携わる教員やスタッフの職能開発をサポートすることが含まれており、評価に携わることがキャリア形成にとって重要であると評価従事者全員が認識できていることである。

4 つ目は、自己点検評価書を作成する約 2 年間の間に CEA と非常に多くのコミュニケーションを持つため、その過程において教育機関と CEA との間に信頼関係が形成されることである。

(4) 日本の英語教育専門分野別評価導入への示唆と今後の展望

日本の現状の評価と海外の専門分野別評価の一番大きな違いは、評価に対する教員やスタッフの意識や態度である。日本の英語教育の評価の課題から明らかな通り、評価そのものが教員の自発性を引き出すようなものでない限り、改善につながるような実質的な評価は難しいと言わざるを得ない。

海外の専門分野別評価のあり方からわかったことは、どちらのアクレディテーション機関においても、評価に従事する人たちに非常に好意的に受け入れられている。それは、評価をする側とされる側が、教育の質を改善するという共通の目標に向かって対等な立場で協同して作業を行い信頼関係を築き上げる仕組みがあるからである。その為には、評価をされる側の教育機関の質改善の為の明確な方向性を示すだけでなく、評価に従事する教員自身のキャリア形成をサポートするような体制が必要である。そのような評価のあり方をなくしては、「真の価値」ある評価の実現は難しいのではないだろうか。このことは、今後の日本の英語教育だけでなく専門分野別認証評価導入の鍵となると言える。これらの調査結果をもとに、今後は、英語教育に関する共通の評価の枠組みを構築し、各大学で恒常的にその評価を改善のために活用することができるシステムの実現化を目指す。

参考文献

(1) 齊田智里 (2011). 「大学英語に求められる評価とは」 『英語教育 5』 32-34 頁

(2) Mulvey, B. (2010). University accreditation in Japan: Problems and possibilities for reforming EFL education, *Language Teacher*, 34.1, pp.15-24.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

竹田真紀子 “イギリス英語教育におけるアクレディテーションの役割 -British Council に関する調査から-

The Roles of Accreditation for English Language Teaching in the UK – Based on an Investigation of British Council-” 大学評価学会年報『現代社会と大学評価』第 11 号 (査読有) 2015、pp.95-120

竹田真紀子 “大学英語プログラム評価の現状と課題-大学教員に対する意識調査の結果から-The Current State and Challenges of English Program Evaluation at Japanese University: Based on an Attitude Survey of Teachers” 中部地区英語教育学会紀要 第 43 号 (査読有) 2014、pp. 161-168

[学会発表] (計 6 件)

竹田真紀子 “アメリカ英語教育におけるアクレディテーションの現状と役割 :

The Commission on English Language Accreditation に関する調査から” 全国英語教育学会全国第 41 回熊本研究大会、2015 年 8 月 8 月 23 日、熊本学園大学

竹田真紀子 “イギリス英語教育におけるアクレディテーションの役割 -British Councilに関する調査から-” 中部地区英語

教育学会和歌山大会、2015年6月28日、和歌山大学

竹田真紀子 “Possibilities of Applying Frameworks of Internationally

Recognized English Program

Accreditation to University Contexts

in Japan” 大学英語教育学会第 53 回国

際大会、2014 年 8 月 29 日、広島市立大学

竹田真紀子 “Possibilities of Applying Frameworks of Internationally

Recognized English Program

Accreditation to University Contexts

in Japan” 第 17 回応用言語学会国際大

会 World Congress of Applied

Linguistics (AILA)、2014 年 8 月 15 日、

オーストラリア / ブリスベン

竹田真紀子 “英語教育の質改善におけ

る大学認証評価の意義-大学英語プログ

ラム評価の実態と教員の意識から-” 大

学評価学会第 41 回研究大会、2013 年 8

月 24 日、日本福祉大学中央福祉専門学

校

竹田真紀子 “大学英語プログラム評価

に対する教員の意識と大学認証評価”

中部地区英語教育学会富山大会、2013

年 6 月 30 日、富山大学

6 . 研究組織

(1)研究代表者

竹田 真紀子 (TAKEDA MAKIKO)

愛知学院大学・総合政策学部・講師

研究者番号：30521744